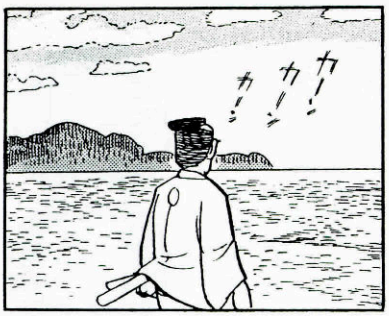
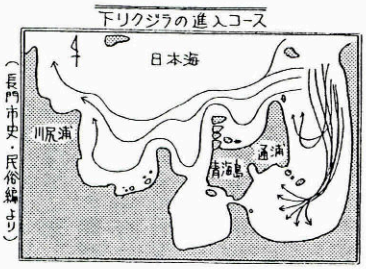
国歩艱難策いまだ成らず
身を忘れて聊か献ず野芹の誠
才疎くして万事人望に違い
徳薄くして多年世情に背く
皎月門前誰か石を砕く
芳梅籬外渠れ楹を崩る
松を撫して只託す千秋の後
清風に問うあらば我名を答えん

（財政再建の歩みは困難をきわめ計画通りに進んでいない。いやしい身であるが私は一身一家を忘れてこの仕事に没頭している。しかし才能に乏しく、しかも徳もなく、やることなすことの多くが世の中の人情に背く結果になった。白々と月の照る門前で私をにくむあまり溝のそばを砕く音がしたり門柱に切りつける音がすることもある。しかし私は信念をまげるつもりはない。私の考えや行うことは今の世の人にはわからないかもしれない。せめて何百年か後にそれがわかってもらえる日がきたら私の名前を知らせてほしいと私は庭の松をなでながら思いを託すのです。）

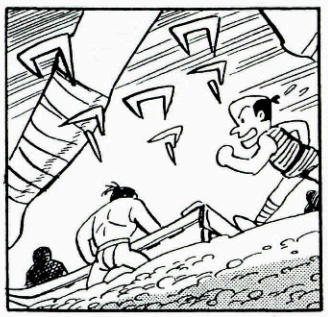


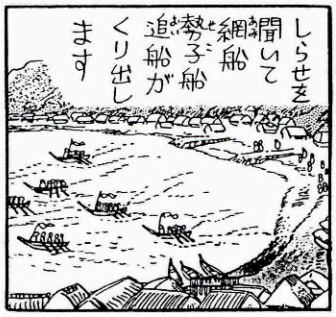
北浦の海には
その昔、鯨が
たくさんやって
きました

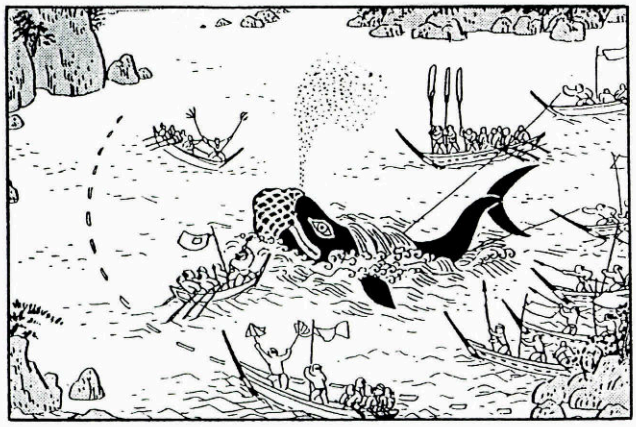


（長門市史・民俗編より）

そこで各地に鯨組が
結成され捕鯨が
さかんに行われました







そのロシアが鎖国政策をとり続ける徳川幕府に開国をせまったのは文化元年（一八〇四年）のことでした

〈以下次号〉